

アンケート調査結果 まとめ（全体分析）

今回のアンケートの回答から、学校の授業以外の時間をどこでどう過ごすかについての関心は総じて高いことがうかがわれる。対象となった児童生徒の年齢の幅が広く、障がいの状態も多岐にわたるため、経験してきた活動や何を期待するかには差異が認められるものの、子どもの成長や自立と家族の生活の充実のために学校以外で活動する/時間を過ごす事への期待は大きい。

現在ある福祉サービスや教育活動の利用状況をみると、障がいのあるこどもの家庭・学校以外の活動の場として、学童保育の存在が大きく、市立中学校ではクラブ活動の参加がある。低年齢ほど、様々な活動集団の中で力をつけることに積極的で期待度も高く、能力を高めるための療育を求める声が相対的に高い。福祉サービス等の認知度は総じて支援学校で高く、また日中活動でサービスの利用が多いのはこのグループである。

保護者の日中活動への関心の高さを反映してか、「放課後等デイサービス」制度自体の認知度はまださほど高いとは言えないながらも（認知は全回答者の3割以下）、そのようなサービスを利用することについての漠然とした希望は相対的に高く出ている（『はい』40%、『わからない』43%）。ひとつの傾向としては、既に学童などの利用経験がある家庭で放課後デイに対する期待も高いようである。放課後デイ利用希望の理由としては、就労やレスパイトよりも本人の自立や第3の場所づくりの方が多かった。

既存のサービスの中で、障がいのある子どもが日中活動を行う上で重要なのが移動支援（ガイドヘルプ、学校学童送迎等）である。子どもが成長するにつれ、自立や社会性を育む必要を訴える声は目立つものの、実際に移動支援を利用している家庭は少ない。経験者の利用の理由として、保護者の就労や兄弟にふり向ける時間のため、など家庭の事情から家以外で過ごす時間を確保する必要があるという状況がうかがえる。サービス本来の目的から外れ、利用者それぞれが足りないところを使えるサービスで代用し、生活をやりくりしている様子が見て取れる。子どもの「自立」に欠かせない移動支援サービスであるが、実際の利用には規制が多く放課後活動の移動には使いにくいという声が多い。利用したいが手続きが分からない、という声や、自力で事業者を見つけるまでが大変、という声も多く、利用に至るまでのハードルが高いと言える。

その他、生活上で困っていることについて尋ねたところ、福祉サービスや関連の情報を教えてほしい、という声が多数寄せられた。「幅広い情報」と「必要な情報」が求められている。更に、既存の福祉サービスでやりくりしながら就労することの困難さ、障がいのある子どもを育てる・共に暮らすことの大変さなど、寄せられた声は多数ある。